

## 蛍光色への傾倒

### ～ペルー・タキーレ島の織物文化の現在～

木野理恵

北九州市立大学文学部人間関係学科

#### 要旨

ペルー・タキーレ島は、伝統的に織物作りが大変盛んなところである。島民は男女ともに織物を織る作業をこなす。元来、島民の生業活動は食物を得るための農作業、糸の加工からを含めての織物作り、毛や肉を得るための家畜の世話などであった。また、織物を近隣の他の地域の人と交換し、自分達が生産していない農作物などを手に入れていた。しかし、近年この「織物」や「伝統的生活」を特徴として観光客を集めており、これによって島には貨幣経済が導入され、「織物」や「伝統的生活」は大きく変化している。

観光地化による変化として、島民は観光客用の織物(みやげもの)を作る、自分達の伝統である製品の色を変えるといった変化が起こっている。特に観光客用の織物は、個人々の現金収入に直接結びつくため、それらの生産者である島民は観光客の好み、嗜好の傾向を気にしている。例えば従来は作っていなかったつばつきの帽子や、鞆などの小物は、自分達では使わないが観光客用として新たに作っている織物製品である。

しかし、製品のデザイン(色、模様など)に関して、必ずしもそのようにして作る織物製品が観光客の好みを反映してはならず、むしろ極めて生産者の好みの反映になっていると思われる。たとえば、観光客は「伝統的」草木染めを模したようなくすんだ色合いの織物を求めることもあるが、売っている織物全般的に化学染料によるはっきりした色や蛍光色のものが多く、これは日常において島民が積極的に自身の衣装に取り入れている色である。

本論文では、タキーレ島民が作成する織物に焦点をあて、外部からの影響によりそのような伝統的物質文化のデザインがどのように変容するのかを提示し、またなぜそのような変容の仕方を見せるのかについて考察する。

伝統的文化はその社会において慣習であり、その技術は受け継がれていくものである。だが、原材料に関係する新しいマテリアルを手に入れるなど、影響があったとき、その物質文化を物質文化たらしめている部分以外で(それを決めるのは生産者の裁量である)、積極的な変容が認められる。その生産者の好みともいえる変容は、変容であるが、結果的には彼らが思う彼らの物質文化に帰結し、「伝統的」物質文化になるのである。

#### 目次

はじめに	第3章 観光地となったタキーレ
第1章 調査値概要	第1節 タキーレ島の観光実態
第1節 ペルー共和国概要	第2節 タキーレ島の観光の取り組み
第2節 タキーレ島地理的概要	第3節 タキーレ島の現状とは
第3節 タキーレ島における生活	第4章 慣習的技術の変化
第2章 タキーレ島民が実際に使用している織物、編み物について	第1節 工程
第1節 現在のタキーレ島民の服装概要	第2節 新たな織物、編物
第2節 デザインが表わす社会的な意味	第3節 色彩と模様
第3節 赤へのこだわり	第5章 考察
	第6章 結論
	引用文献

はじめに

ペルー、タキーレ島は、伝統的に織物、編物作りが大変盛んなところである。島民は男性女性ともに織物を織る作業をこなす。元来、島民の生業活動は食物を得るための農作業、糸の加工からを含めての織物作り、毛や肉を得るための家畜の世話などであった。また、農作物を近隣の他の地域の人と交換し、自分達が生産していない作物や家畜の毛などを手に入れていた。しかし、近年この「織物」や、「伝統的生活」を特徴として観光客を集めており、これによって島には貨幣経済が導入され、「織物」や、「伝統的生活」は大きく変化している。

観光地化による影響として、島民は観光客用の織物（土産物）を作る、自分たちの伝統である織物製品の色を変えるといった変化が起こっている。

特に観光客用の織物は、個々人の現金収入に直接結びつくため、それらの生産者である島民は観光客の好み、嗜好の傾向を気にしている。例えば従来は作っていなかった肩掛けかばんやファスナー付きの小物入れなどの製品は、自分たちでは使わないが観光客用として新たに作っている織物製品である。

しかし、製品のデザイン（色、模様など）に関して、必ずしもそのようにして作る織物製品が観光客の好みを反映してはならず、むしろ極めて生産者の好みの反映になっていると思われる。例えば、観光客は「伝統的」草木染めを模したようなくすんだ色合いの織物を求めることもあるが、売っている織物全般的に化学染料による発色の良いはっきりした色や蛍光色のものが多く、これは日常において島民が積極的に自身の衣装に取り入れている色である。

本論文では、タキーレ島民が作成する織物、編物に焦点をあて、外部からの影響によりその

ような伝統的物質文化のデザインがどのように変容するのかを提示し、またなぜそのような変容の仕方をみせるのかについて考察する。

伝統的物質文化はその社会において慣習であり、その技術は受け継がれていくものである。だが、原材料に関係する新しいマテリアルが手に入れるなど、影響があったとき、その物質文化を物質文化たらしめている部分以外で（それを決めるのは生産者の裁量である）、積極的な変容が認められる。その生産者の好みともいえる変容は、変容ではあるが、結果的には彼らが思う彼らの物質文化に帰結し、「伝統的」物質文化になるのである。

## 第1章 調査地概要

### 第1節 ペルー共和国概要

正式名称ペルー共和国 (República del Perú)、首都はリマ (Lima)。南米の中央部分の西側、太平洋に面し、エクアドル、コロンビア、ブラジル、ボリビア、チリと国境を面している。地域によって異なった気候である。大きく3つの地域に分かれ、太平洋沿岸は、コスタ (Costa) と呼ばれる海岸気候で、夏は晴天に恵まれるが、冬は霧が発生し、曇天の日が続く。山岳地帯はシエラ (Sierra) と呼ばれ、標高により気候は大きく異なる。比較的標高の低い地域は湿潤な気候だが、高地になると一日の寒暖の差が激しくなる。アンデス山脈東側の、国土の約50%を占めるジャングル地帯はセルバ (Selva) と呼ばれる熱帯雨林気候で高温多湿で、冬は気温摂氏40度以上、夏は雨季となる。面積は128万5,216 km<sup>2</sup>で、日本の約3.4倍の広さを持つ。人口約2,714万人 (2000年時点)。先住民47%、混血40%、欧州系12%、東洋系10%で構成される。言語はスペイン語を公用語とし、特定の地域でのインディ

オの言語としてケチュア語・アイマラ語が用いられている。宗教は、国民の95%がローマ・カトリック。土着信仰も残っている。時差は日本より14時間遅れである(大使館発行資料)。

#### 【地図1】

### 第2節 タキーレ島地理的概要

南米ペルーとボリビアの国境沿い、中央アンデス地域にティティカカ湖はある。海拔は3,810m。運行できる湖としては世界で一番高い標高に位置する。【写真1】

ティティ(titi)は、現地語でピューマ、カカ(caca)は、灰色で、ティティカカ湖は「灰色のピューマ」という意味である(鈴木 2000)。ティティカカ盆地の中心は古代都市ティワナコがあった場所で、インカ人がこの地域を支配していた間、またその後の時代においても、この湖と都市は、太陽、月、人間を含む世界が創造された伝説の地として、アンデス文化圏で重要な場所としてみなされてきた(D・M ジョーンズ B・L モリノー 2002)。

タキーレ島はこのティティカカ湖の西側ペルーのプーノ県に位置する。【地図2】湖畔の町プーノからモーターボートで3時間ほどのところにあり、標高3,815m、面積11万km<sup>2</sup>、全長6kmの島である。港に到着すると目の前は急な斜面になっており、530段もの石段を登り詰めてようやく村の入り口となる。現在島には約2,000人が生活をしている。

#### 【写真2】

### 第3節 タキーレ島における生活

タキーレ島において日常で使われる言語は現地語のケチュア語で、現在では、スペイン語は小学校から習うものの、40歳代になると話せない人も多い。住居は石と日干し煉瓦、トタ

ン屋根で作っている。島にはカトリックの教会がひとつあり、島民のほとんどがその信者である。インカの地母神で、植物と動物の豊穡、多産をつかさどるパチャママ(pachamama)を崇拜する土着信仰も残っており、農耕の主要な節目になる時期は、常にコカ(エリトロキシン・コカ)の葉や、チチャ(とうもろこしを発行させたビール)を使い、祈りが捧げられる。島民の服装は第2章で詳しく述べるが、伝統的な服装を身につけている。男は腰巻や身分をあらわす帽子をかぶり、女は短いスカートに、頭にはベールをかぶっている。

食物は主に、いも、とうもろこしが中心で、ほかに豆類などを作っている。最近では、購入してきた米やパン、野菜なども摂取している。水道はないが、一部の家庭ではソーラーパネルによる自家発電で電気を得たり、ガスを購入したりしている。そのような家庭は年々増えてきているようだ。島民の生業は、織物・編物業、農業、漁業、観光業、牧畜である。そのうち現金収入に結びつくのは観光業と、土産物として作られる織物・編み物業のみである。漁業は、観光客が食べる魚を捕る漁師は現金収入につながるが、それ以外は自家消費分を捕るに過ぎない。近くの湖で小さな魚を捕り、スープに入れる程度だ。羊は各家庭に約6頭から20頭飼われており、滅多に使うことはないが、羊毛を得ることもある。家を新しく建てる時など何か特別なことがない限り、羊を食料として食べることはない。牛は一部の家庭では飼われている。ミルクを得たり、牛の力を使って畑を耕したり、糞を燃料として使っている。

島民のコミュニケーションで欠かせないものとしてコカの葉がある。気持ちが高揚し、不快感をぬぐう効能からか、高地に生活しているタキーレ島民は、ガムの代用のようにコカの葉

を毎日噛むか、コカの葉をそのままお湯に入れ、お茶として飲んでいる。そして、それだけのためにコカの葉を持っているのではなく、島民はいろいろな場面で交換、贈与している。島民同士のあいさつの場面では必ずといっていいほどコカの葉が交換されており、それは特に男性に見ることができる。祭りの日、結婚式など特別な日には、大量のコカの葉が交換、贈与される。タキーレ島民にとってコカの葉は、人とのコミュニケーションにおいて非常に大きな役割を果たしているものである。

タキーレ島には21人の「アウトリダーデス」と呼ばれる島の男性リーダーたちがいる。この各リーダーたちは島の村長をはじめ、判事など要職を担う。観光客を取り仕切るのもこのアウトリダーデスの役目である。アウトリダーデスは、毎年11月の島民による選挙によって選ばれる。任期は1年間である。18歳以上の男女が選挙権を持ち、1年間の自分たちのリーダーを拳手により選ぶ。このアウトリダーデスは2年連続選ばれることはなく、必ず1年交代の仕組みをとっている。また、儀式などには、必ず妻を後ろに連れて参加する。

そのような生活の中でタキーレ島民は、誰もが織物、編物を作ることが出来る。彼らは、人と話しているときでも、畑を耕しに行く道中でも、羊の世話をしながらでも、男性は編物を、女性は主に織物に使う糸をよりながら歩いている。絶えず指は動き、休まることはない。家では女性が地べたに座り、織物を作る。その横には男性が編物をおこなう。この島において、織物、編物に携わることは、昔から彼らの生活に組み込まれたものであり、当たり前のことなのである。

## 第2章 タキーレ島民が実際に使用している織物、編物について

### 第1節 現在のタキーレ島民の服装概要

タキーレ島民の日常の服装は、いわゆる「伝統的」衣装である。この伝統的とは、タキーレ島民ではない者がその衣装を見て「伝統的だ」という印象を持つという意味で用いる。つまりタキーレ島民の自意識は含んでいない。

このタキーレ島における伝統的衣装の光景はペルーの他地域と比べても特徴的なことで、同国内からタキーレ島へ観光で訪れる人が少なからずいることからもいえる。実際、タキーレ島からモーターボートで3時間ほどの湖畔の町プーノには、タキーレ島民がよく買い物などで来ているのだが、その特徴的な衣装からすぐにタキーレ島出身者であることが、筆者でさえも容易にわかるほどである。町の多くの人は、ティーシャツにジーンズなどのいわゆる近代的服装であるからだ。タキーレ島民は、盛んに織物、編物を日常的に生産し、なおかつそれを日常的に身に着け、自ら消費しているといえる。よって、以下、タキーレ島民の装いを、(1) 日常着、(2) 特別な日(結婚式や、祭り等)に分けて紹介する。

#### (1) 日常着

##### 男性

黒のズボンに白のブラウス、その上に黒のベストを着る。チャリもしくはファッハといわれる帯を腰に巻く。自分の身分にあった(身分によるデザインの違いは次節でくわしく述べる)帽子をかぶる。既婚者はコカ袋を携帯する。

##### 女性

スカートを何枚も重ねてはく。身分にあった色の既成のセーターを着る。黒い被り布をかぶる。【写真3】

## アウトリダーデス

日常着の上に黒のジャケットを羽織る。コカ袋は腰に巻かず、ジャケットの内側に挟み込む。

### (2) 特別な日

#### 男性

日常着に、ファッハを巻き、コカ袋を携帯する。帽子をかぶる。【写真4】

#### 女性

スカートを日頃以上に枚数を増やして重ね、一番上に出る色を黒にし、腰にファッハを巻く。黒い被り布をかぶる。【写真5】

## アウトリダーデス

日常着に加えて、肩に布をかけ、金色の棒を持つ。耳あてのある多彩な色を用いた帽子の上に、既製品のつば付きの黒い帽子をかぶる【写真6】

以上のような衣装で、足元は古タイヤからつくられたオホタ (ojota) と呼ばれるサンダルを履いている。

タキーレ島民が、四六時中このような伝統的衣装にきっちり身をつつんで生活しているかという、かならずしもそうではない。筆者が滞在中、島の若い男性が既成品のティーシャツを着て生活している光景を幾度となく見かけたし、子どもたちも既成のものをよく身に着けていた。しかし、ちょっとした外出には着替えをおこない、子どもたちも学校へ通う際には島の衣装(日常着)を着用していたことなどから、あくまでも「身だしなみを意識する」ときには、島の衣装を着用するということがわかる。

## 第2節 デザインが表わす社会的な意味

1節で紹介した島の衣装のほとんどが、島民によって製作されている織物や編物である。そのデザイ

ンには、色や模様などによって社会で示す役割が表わされている。また贈り物としての意味も重要で、作り手が男性か女性か、もらい手が男性か女性か、といった違いもそれぞれのものによって決まっている。以下そのことを表にする。

### 【表1】

この表から、タキーレ島民の織物、編物に見られるデザインのこだわりに関し、社会的意味を持っているという点で特徴的だと思われることをまとめる。

島の権威者、リーダー的存在であるアウトリダーデス、ということを表わすアイテムが3つある。チュウリヨ (chullo) は全ての男性がかぶるニット帽のことを指すが、アウトリダーデスのかぶるチュウリヨは、耳あてが付き、より多彩な色が使われている。赤を地の色にしているが、その上に細かな模様が青、黄、緑、などの色で鮮やかに描かれている。プンチョ (puncho) は暗灰色を基調として模様が織り込まれた、いわゆるボンチョ型の織り布で、アウトリダーデスが儀礼のときに肩にかけて身に着けるものである。色は全体にグレー一色なので地味な印象を与える。チャマラ (chamara) は黒の長袖ジャケットで、アウトリダーデスが日常着として身に着けるものである。黒の織物から作られている。模様はない。【写真6参照】

次に、髪の毛を織り込むという点で特殊と思われるチュンピ (chumpi) について説明する。結婚式の際、新婦は髪の毛を切る。その髪の毛からより糸を作り、織物に混ぜ込んでチュンピは作られる。チュンピは黒と白の羊毛で織られる腰巻で、主に男性(髪の毛の主の夫)が日常着の一部として腰に巻いている。実際、毎日の生業活動の上で腰の負担を減らすという効果と、また妻の髪の毛が織り込まれていることにより、守られているという精神的にも安心感を与える効果があると島民はいう。

タキーレ島の衣装は、使用される色によって社会的身分がわかるようになってきているわけだが、主に基調になっている色は、黒、白、赤の三色だということができる。

黒は、すべての衣装にだいたい基調の色として使われているが、女性のスカートの例などから、より「フォーマルさ」を表わすときにも使われているといえる。実際、筆者が結婚式という特別な日の席での人々の衣装を見たとき、全体に黒で統一されているという印象を受けた。

【写真12】

次に白と赤についてであるが、赤には既婚者という意味があり、逆に同じ箇所が白で表現されている場合は未婚者という意味になる。これは男性の身に着ける帽子チュウリヨ、女性の身に着けるブラウス、セーターなどに表われている。模様入りの赤のチュウリヨは既婚を表わし、上半分が白と下半分が模様入りの赤のチュウリヨは未婚を表わす。既婚の女性が着るブラウス、セーターは赤一色のものである。また、コカの葉入れの袋であるチユスパ(chuspa)も赤を基調とした模様が織り込まれたもので、儀式のときには独身男性や、場合によっては女性も携帯するが、日常的に携帯するのは既婚男性のみである。

### 第3節 赤へのこだわり

筆者がタキーレ島に滞在しているとき、非常に目について気になった「色」がある。それは赤やピンクの蛍光色だ。色の派手さに加え、衣装に使われている頻度も高かった。これら赤系統の蛍光色は18年ほど前から島にもたらされた色であり、盛んに島の衣装に取り入れられ現在にいたっているという(Ines Mamanimachaca 2004)。なぜ、このような蛍光色が好まれ、伝統的衣装に積極的に取り入

られているのか、筆者は疑問を持った。今や、この蛍光色使いの派手さこそが、タキーレの人々の衣装、織物、編物の特徴ともいえるようになってきているのではないかと思われるからだ。以下、そのことについて事例を挙げつつ、慣習的な技法による物質文化を持つ人たちが、外部からの影響(この場合、原材料に関して新素材が紹介される)に対し、どういう理由でそれを積極的に受け入れ、あるいはどういう理由でそれを拒否するのか、ということについて考察したい。

ファッハ(faja)は赤を基調として織られた飾り帯である。儀礼の際には男女ともにこれを身に着ける。現在見られるファッハには、赤系統の色、約30色を使い、見事に細かいグラデーションが表現されている。その赤には、赤、ピンクの蛍光色も含まれている。このように現在のタキーレ島では、化学染料によってつくられる色鮮やかな糸を使い、それがなかった以前のものに比べて派手な織物を作り出している。

タキーレ島内にある、タキーレの織物、編物の歴史を紹介するための博物館には、化学染料を使う以前の織物、編物が資料として展示してある。【写真13、14】それらは総じてくすんだ色をしているが、表わされている模様や基調としている色の配色は今のものとたいして変わらない。つまり、模様や配色はそのままに、置かれた色の中でその色がより鮮やかさや明るさを求めて変化していったというわけだ。それに対し、まことに勝手な意見なのだが、筆者を含めた観光客の感想は、いわゆる昔の地味な色の作品の方が伝統的で好ましく、現在島民が好んで作っているけばけばしい蛍光色使いの作品は、そのような期待をことごとく外して少々残念だ、というものなのである。

タキーレ島民は、鮮やかな色の糸という新し

い素材を、積極的に好んで自分たちの衣装である織物、編物に取り入れている。そしてそれは特に赤系統の色に顕著に見られる。なぜ赤なのか。

前述したように、タキーレ島民の衣装における赤色というのは、既婚という社会的な意味を表わす。先に挙げたファッハや、2節で触れたチュспа、特に日常的に身に着けているというもので、男性であれば帽子、女性であれば上半身にまとうブラウス、セーターがある。現在、そのブラウス、セーターは既製品を購入して得ているもので、彼らが自ら作製しているものではない。だが、そこにも鮮やかな赤色を好む彼らの傾向を見ることができる。既婚の女性たちが日常着ているのは、赤系統の色のセーターなのだが、その内でダントツに赤とピンクの蛍光色の割合が高いのである。それに比べると、男性の帽子の赤はそれほど顕著に蛍光色ではないが、やはり細かいグラデーションのところどころには部分的に取り入れられている。

タキーレ島民にとって、「赤」は社会的に意味があるという点で、他の色より常に彼らの視線、関心を集めている。ゆえに、赤を表現するだけで10色以上を駆使したり、蛍光色を取り入れたりといったところに見られるように、よりバリエーションは広がりを見せているのではないかと筆者は考える。

タキーレ島の織物、編物という物質文化は、描かれる模様や、基調となる配色といったデザイン部分では大きな変化は見せないが、赤を中心に色の種類は多く取り入れ変容している。そのような色の変化は、外部からもたらされた新しい素材による。しかし、それは、社会の映しにもなっている物質文化の特性と関係して選ばれた結果、積極的に受け入れられたのだ。

### 第3章 観光地となったタキーレ島

現在、具体的な原材料の変化とは別に、タキーレ島の織物、編物という物質文化に関して、影響を与えている観光化についてその現状を述べる。タキーレ島が観光客にどう見られているか、そして観光客が何を求めてタキーレ島に来ているのか、考えたい。

#### 第1節 タキーレ島の観光実態

先述したように、ティティカカ湖は全てを創造したという、ペルーの人々にとって重要な場所として歴史を歩んできた。3,800mを超える高地に広がる美しい神秘的な湖と、その湖を称えながら続いてきた人々の伝統的な暮らし。近代化の世界の中で人々が観光地として刺激を求め、目を付けたのがこのティティカカ湖とその中にある島である。現在、ペルー側のティティカカ湖湖畔の町プーノは、ティティカカ湖観光のベースの町として栄えている。旅行者の多くはプーノに着くとティティカカ湖内の島ツアーに参加するので、町に多くある旅行会社はウロス島・タキーレ島・アマンタニ島の3つの島をセットにしたツアーを組んで旅行者を勧誘している。

ウロス島は、土がなくトトラと呼ばれる葦で作られた浮き島で、プーノから30分という近さと、浮島という珍しさから人気がある。アマンタニ島はタキーレ島の隣にあり、プーノからモーターボートで4時間ほどかかる。今でもなお美しい刺繍を施した衣装を島民は纏い、年に1度しか入れない遺跡を持つ、比較的新しく観光開発された島である。それぞれインカ時代からの流れを色濃く持っている。では、具体的にタキーレ島において観光地化がどのように進んでいるのか現状を述べる。

タキーレ島が観光地化されたのは、今から2

0年程前となる。タキーレ島は、トトラと呼ばれる葦を使った浮島であるウロス島とともに、ティティカカ湖ツアーの中心的な役割を果たしている。現在ではこれにタキーレ島の隣にあるアマンタニ島が加わり、旅行会社は3つの島を組み合わせたツアーを行っている。旅行会社が掲示する内容は ウロス島のみ ウロス島 タキーレ島日帰り ウロス島 アマンタニ島(宿泊) タキーレ島が主である。タキーレ島は営んできた生活と、作っていた織物、編物を特徴として観光客を集めている。ここでタキーレ島について、ラテンアメリカに関する情報誌に載っていた文を紹介する。

島にはいまだガスや電気、水道もなく、自給自足の物々交換が続いていた。

(オーラ!アミーゴス52号 2004)

このような文を読んで観光客は、昔ながらの生活を続ける島の人々の生活をイメージするが、事実はまったく違う。島では実際、電気、ガスを買って利用している家庭も存在するし、島民たちは貨幣に換算できる仕事をして生計を立てている。しかし、自分たちの生活にはない刺激がこの島にはあるのではないかと観光客は考える。タキーレ島民は観光客のイメージする伝統的な生活を求められているのだ。

タキーレ島には、毎日11時ころから14時ころにかけて観光客が訪れる。観光客の多くは、日帰りのかたちでタキーレ島に訪れ、そのままプーノの帰途に着く。ツアーにアマンタニ島が加わり、ツアーの宿泊島がアマンタニ島になってしまったことで、観光客がタキーレ島に泊まるためには、ツアーから離れ、泊まりたいと言わなければ泊まれない状況にある。それゆえ、タキーレ島の宿泊客は大変少ない。しかし、日帰りではあるが、1日に最低でも100人以上の観光客がこの島を訪れる。

観光客は1月から3月の雨期の時期に少なく、観光客の長期休暇と乾季が重なった8月に一番多い。タキーレ島を訪れる観光客は、9割近くが白人で、残りがペルー国内からのペルー人である。そのペルー人には修学旅行生も多い。タキーレ島の伝統的な生活は、ペルー国内でも珍しいものとして注目されているといえよう。

## 第2節 タキーレ島の観光の取り組み

島内にはレストランが21軒あり、土産物屋が3軒、水や食料などを置く店が10軒ほどある。レストランでは、観光客がひとつのレストランにかたまらないように、アウトリダーデスがツアーガイドと交渉しながら仕切っている。実際にはレストランとして毎日開いているところと開いていないところがあるようだった。

土産物屋には島民の作った織物、編物が、ところ狭しと並んでいる。島民はそれらひとつひとつに番号をつけている。これは各家庭に振り分けられた番号である。ゆえに、何番が売れたかによってどの家庭のものが売れたのかわかるようになっている。月に1度ほど各家庭から誰かが来て、自分たちの作ったものを整理し、なるべく各家庭が同じ数を出すように工夫されているようだった。

島民の現金収入は、土産物の売り上げと、一部の家庭がおこなっているレストラン、売店、民宿の売り上げとなる。それ以外に島民の現金収入はまったくない。彼らの織物、編物を作り上げるペースは人それぞれではあるものの、編物は約4ドルの帽子を週に1個から2個、織物は約10ドルから100ドルのものを月に1個作れるか作れないかである。筆者が住み込んでいた家庭では、織物の収入が年に約100ドルから200ドルであった。パンが8つで1ドルほどの生活だが、他にも糸や野菜を購入した

り、ガスを購入したりするので生活費はかさむ。また子どもがいる家庭では、子どもは16歳になると島を離れてプーノで勉強するのでそのためにもお金は必要となり、今の収入では生活は楽だとはいえない。

島民の収入源である織物、編物であるが、土産物屋では実に多様な製品が売られている。島民が身に着けているコカ袋や、帽子などはもちろんのこと、実際には彼らが身に着けない、島にはそれまでなかった観光客向けのものも置いている。例をいうと、つば付きの手編みの帽子、織物を縫い付けたリュック、ベスト、ヘアバンド、かばんである。これらは、島の若い世代が率先的に作っている。観光客にとっても、島民が日頃身に着けている織物、編物より、これらの実用的な新しい製品の方が好評であった。

しかし、実際に土産物がよく売れるのかといえそうではない。タキーレ島の土産物価格は、ペルーの他の地域で作られ売られている同じような帽子や織物と比べて2倍近く高い。そのため、安さを求める観光客はタキーレ島のものをあまり買っていないのが現状である。しかし島民は、織物、編物の工程に1週間から大きなものでは2ヶ月以上もかけており、その手間を考えると割合に安価な値段で提供しているといえる。

価格について、タキーレ島では価格統制をおこない製品について一定の価格を維持している。島内で組合をつくり、話し合いですべての製品の値段を決める。つまり、作った人もデザインも違うが、帽子であれば4ドルほどと島内で統一しているのだ。レストランでも同様のことがいえ、メニュー、価格ともすべて統一されている。民宿も、同じ家に観光客が集中して泊まらないように、観光客が家を選ぶことは出来

ず、アウトリダーデスが計画して観光客をまわしている。筆者はタキーレ島に3ヶ月弱滞在していたのだが、アウトリダーデスや島の人から滞在している家を替わるように何度か言われた。そこから、タキーレの社会では人々に平等を求める強い意識があることを感じた。このようにタキーレ島では、すべてにおいて価格に差をつけず、島内の自由価格競争をおこなわないようにしている。これは、値切りによって、不当に製品の値段を下げていかないための工夫ともいえる。ペルー国内の他の土産物屋では値切るのが当たり前であるが、タキーレ島では、ひとつひとつの製品に値札が貼られており、交渉することは出来ない。この取り組みはペルー国内の他の観光地で見るとはなかった。タキーレの人々にとって土産物は安定した収入源となっている。

島内の競争を避けることは、観光参入以前からの思想が影響していると思われる。島のとっている政策においても、アウトリダーデスは2年連続選出されることはなく、共同で使う建物を作る際にも各家庭から人を出し、協力して作っている。観光が入り、作ったものを土産物として売るといっても同様に、みな平等にという以前からの仕組みを応用したのだろう。しかしその仕組みがあっても、ただ土産を作って売っている家庭と、それ以外の収入として店や民宿をおこなっている家庭とでは少しずつではあるが、収入の差が出てきている。

### 第3節 タキーレ島の現状とは

見てきたとおり、タキーレ島は観光地化も進み、ここ20年ほどで島民の生活は大きく変化している。ここでは織物、編物以外の面で何がどう変わっているのかを具体的に述べる。

#### (1) 経済面

20年の間に観光をはじめとして、外部からの影響によりタキーレ島の経済は大きく変化した。1節で紹介したとおり、タキーレ島を説明する観光雑誌には、島内の状況を自給自足で物々交換をおこなっていると書いていたが、実際はそうではない。確かに、以前は物々交換がおこなわれていたが、観光地化と共に島は貨幣経済へ組み込まれた。物々交換の生活とは、島民が作った作物をまとめて手漕ぎの大きな船に乗せ、湖畔の町プーノまで何日もかけて行き、そこで生活に必要な塩や砂糖、アルパカやリヤマの毛、化学染料やお金といったものを、自分たちの作った作物と交換して得るという生活であった。しかし、現在ではこの物々交換は全くおこなわれず、すべて貨幣を介して必要なものは各自、得るようになっている。手漕ぎの船がモーターボートになったこともあり、各家庭でプーノに買い出しに行くことが簡単に出来るようになった。それに合わせるように、畑で作る作物は自分たちで消費する分さえ作ればよく、現在島では利用していない畑がそこかしこに目立つ。

以前は島に訪れなかった行商も、貨幣経済になったことにより月に1度は訪れ、野菜、果物、糸などを売っている。島民はこれらさまざまな売り物を島にいながらにして手に入れることが出来るようになり、それらは今や島民にとって生活必需品になっている。金銭的に裕福であれば、電気をひいてテレビを見ることも可能である。以前はタキーレの食生活にはなかった米や野菜といった食べ物も、今では日常食として食べるのが当たり前になっているものである。このような変化を、島民は便利になったと好意的に受け入れている。

観光客を受け入れた社会となることで、生活の中での貨幣に関する意識も変わっている。観

光地化される前、人々が貨幣という感覚に近づくものは、交換するものとして作っていた作物であったはずだ。しかし、普段着として着ていた服装や、祭りの際の衣装が観光地のものとして着目され、これらの織物、編物を作り、売ることが、現金収入になる。これだけの作物があれば、これだけの品と交換できるという感覚から、これだけの織物、編物を売れば、これだけのものが買えるという感覚になる。島民にとって織物、編物を作るということは、自らの衣服を得るための行為であったはずだ。だが、それは現在、貨幣という収入をえるための仕事となり、出来たものは商品と認識される。この島の生活に観光が入って20年ほどとなり、現在の若い世代は生まれたときから観光地の島という環境で育ってきている。織物、編物を作ることは仕事だという感覚が、彼らにとっては特に当然のものである。

## (2) 生活面

貨幣経済になったことで、生活も随分と変わっている。前にも触れたが、食べるものも、イモとトウモロコシといった穀物のみであったのが、野菜や米、果物など様々な食べ物を食すようになった。そのことにより現在、島民の虫歯問題が深刻化している。

また、日常的に観光客が島内に存在し、島民にとって生活が常にその視線に晒されているという事実も、島の環境を大きく変えている。例えば、その変化は、島民にとって重要と思われる儀式に見られた。タキーレ島では毎年5月3日に合同の結婚式が行われるのだが、たまたま筆者の滞在する11月にも1組の結婚式がおこなわれた。その結婚式の中で、世話役の席に明らかに島の顔ではない(メスティースと思われる)女性が座っていた。彼女はそこで、ココの葉やとうもろこしを発酵させて作ったチ

チャというお酒を振舞う役目をした。彼女は1日のみの滞在であったようだが、島内で自分以外に明らかに島の人間ではないと思われる人が滞在し、このような儀式の重要な立場にたつとは思っていなかった筆者にとって、驚くことだった。彼女の儀式での振る舞いを、同席した彼女の連れ合いがビデオ撮影しており、彼らが島の言葉を理解せずスペイン語を話していたことから、ペルー国内かもしくはその他の国からの観光客であったと思われる。

他にも、たくさんの島民と正装したアウトリダーズが話し合いをするために広場に集まるときは、観光客にとって格好の撮影チャンスとなる。たくさんの観光客に取り囲まれた中で、島民たちは島のことを決めるための話し合いをしなければならない。祭りの際にも、同様にカメラを構えた観光客がいて当たり前という状況になる。このように、島内の行事には、執りおこなっている島民たちだけがいるということもはやなく、そこには常に外部の人間である観光客が存在している。島民にとって、行事や日常に外部の人がいる、あるいは彼らがそこに参加するということは当たりの感覚となっている。このような島の状況を利用して、島外からやってきた者が観光客に扮し、島内で盗みを働くといった犯罪が起こっており、筆者が滞在中も問題になっていた。

観光客を迎えたことで、タキーレ島は現金収入を得ている。自分たちの文化を見せるということでこの道が拓けた現在、タキーレ島民は、観光客に見られるという環境に自分たちを置いた。島民にとって何も特別なことではない男が歩きながら編物をしたり、女も歩きながらより糸をしたりすることも、観光客は珍しがってその光景を写真に撮る。これがタキーレ島の日常である。島民は観光客に生活空間を売り、お

金を得ているともいえる。

#### 第4章 慣習的技術の変容

##### 第1節 工程の変化

観光が島に入る以前、島民は織物、編物の原材料である毛を高地で生活している人々と交換して得てきた。かつてはアルパカやリヤマの毛を使っていたと思われるが、羊が入ってから羊毛に変わった。それらの毛は、よって糸にする。

糸を染める染料は、自生している植物を使ったり、後には交換してきたコチニールなども使っていた。このように、毛から糸を作り、それを染めるという一連の工程が終わってから初めて、織ったり、編んだりという製品作成の工程に入っていた。

しかし今では、羊を用いた織物、編物は昔のものとなり、染色の作業も見かけることはない。そのかわりに、購入してきた染色済みの糸を用いて織物、編物を作っている。貨幣で糸を購入するにあたり変化した内容を以下に比較をあげる。

約20年以上前(羊毛)	現在
飼っている羊の毛を刈る	プーノ、もしくは行商から細く2本に分かれた染色済みの糸を購入する (300gで1ドルほど)
カンティーナを用い、少しずつより糸をおこない細くする	カンティーナを用い2本に分かれている糸をよる
の糸をふたつの	

糸のかたまりにカン ティーナで分ける	よった糸を使いや すいように糸玉にす る
ふたつに分けてい る糸のかたまりを、カ ンティーナでゆるく ひとつによってまと める	織物の開始
8の字の状態に糸 をまとめる	
糸を洗う	
染色を行う 1	
色のついた糸をカ ンティーナで細く撚 る	
織物の開始	

【表 2】

1 染色の方法

1. 植物は細かく刻み、なべで煮て、色が出た  
ら羊毛を入れ、長時間煮る。
2. 糸を出して洗う
3. 天日干しする

糸を作る際に、糸をよる工程が必ず入る。このより糸の作業に、カンティーナと呼ばれる工具が使われる。カンティーナは30cmほどの棒の先に、丸い皿がついている工具で、カンティーナをこまのようにまわし、糸に回転をかけることにより、均等の太さの糸を作ることが出来る。このカンティーナを用いるより糸の作業は、羊毛を使っていた頃はもちろん、現在の購入し

てきた糸も必ずおこなっている。現在でもおこなう理由は、はっきりとはわからない。しかし、親子間の伝承でもまず先にカンティーナによる、より糸のやり方が伝承され、日常のあらゆる片手間にいつもカンティーナを使っていることから、カンティーナを使うことは合理的な理由だけではないのではないと思われる。

糸作りの工程において、現在と20年以上前では時間的にいうと、1ヶ月以上の大きな時間短縮が行われており、島民は大変楽になったと言う。現在でもまれに羊毛をつむぐ様子を見るが、染色をしなくてもよい、茶や白として用いられる。祭りの際、新しい織物、編物を作る時間の短縮になったという利点もある。しかし、それ以上に、観光地となったタキーレ島において、仕事となった織物、編物は、より早い時間でよりたくさんのもを作らなければならない商品でもある。以前のように、羊毛から染色まで自分の手でやっていくのでは、植物の季節に合わせて色を作るので、ひとつの糸をつくりあげるのに時間が多くかかりすぎてしまいすぐには織物、編物が出来ない。そのため、貨幣が手に入ったことで、染められた糸をお金で購入するようになった。糸を購入し糸作り工程を省くことにより、よりたくさん時間を織物、編物作りにあてることができ、その結果、土産物屋に自分の作ったものをより多く置くことになる。

第2節 新たな織物、編物

第3章でも前述したとおり、島民は自分たちの生活では用いない新たな織物、編物を作り出している。この取り組みは若い世代が積極的に取り組んでおり、外国人である筆者は新たな商品は何がいいかと相談された。具体的にいうと、つばつきの帽子、織物が縫いつけられたリュック

クサク、織物、編物が縫い付けられたブラウス、ヘアーバンド、肩掛けかばんなどである。筆者が滞在していた家庭で考えていたのは、ファスナー付きのポーチであった。このように、島では、自分たちの生活に取り入れてはいないが、観光客を対象とした伝統工芸品の製品を作っている。これらは観光客にも好評で、実際に売れているのは、島民が身に着けている帽子よりも、観光客用に手がけられた帽子の方である。収入を増やしていくために、観光客向けのものを作るという取り組みはこれからも積極的に続いていくであろう。【写真15】

### 第3節 色彩と模様

タキーレ島の今の織物、編物は色彩豊かなグラデーションを活かしたものが多い。赤がタキーレ島社会の中で重要な色であることは2章で記述した。女性の着るアクリル製のセーターは赤であるし、男性がかぶる帽子には赤と白か赤のみであるかで既婚かどうか判断できる。島民の作る織物、編物には赤が必ずといっていい程入っている。そしてその赤の色彩の部分には、よく見ると多くの赤系統の色が織り込まれている。それらは蛍光のピンクや、えんじ色、桃色など一目見ただけではわからないほどである。赤以外の織り込まれている緑・青・紫・黄色などの色を見ても、それらも同様に、濃い色や薄い色、蛍光色と同じ系統の色の中で色の違いを求めている。また女性が身に着けている一色使いのスカートを見ても、黄色やピンク、青や緑と色とりどりのスカートを身に着けている。

色をたくさん使うことは、町から糸を購入し始めてから特に顕著に現われている。島民は、作るものすべてに細かい色の違いを求めている。自分たちで染色して糸を作っていたころは

作れる色も赤や黒、紫や黄と限られた色で、これらの色は透明感のないくすんだ色が多かった。しかし糸を購入できる環境になった今では、たくさんの色を使い、同じ系統の色にも何色も使いわけをし、グラデーションを活かした作品が多い。以前のものと同じと見比べると、デザインが入らなければ別物のようになってしまっている。

現在、織物には最低30色以上を使っており、経糸1本ごとに色を変えたりしているので、一目見ただけではわからないほどの色の細かさである。編物に関しても同様のことがいえ、帽子に10色以上は使っている。大きな織物を作る際には、織物の真ん中できちんと対称になるような色使いをし、彼らのその感覚とセンスには驚くばかりである。そして織物、編物に使う色に関して共通していることは、以前の染色で使っていた、くすんだ色をほとんど使わないことである。そして自分たちでは作れなかった、化学染料のより強い、明るい蛍光色ばかりを用いている。一時的なブームのようなものかもしれないが、今までに自分たちが出せなかった色に過剰に反応しているようだ。【写真16】

明るい色を取り入れるのは、彼らが購入して着ている既製の服などにも現れている。特に女性が身につける上の服は、以前は作っていたので、色も染料から作った色で、めだたないものであった。既婚者の服を例に挙げると、現在、購入している服は地味な赤ではなく、明るい赤の色である。島民はより明るい色の方がよいと答え、土産物屋にもそれを裏付けるように、明るい色で作られた織物、編物が並べられている。タキーレ島民は蛍光色のような明るい色を積極的に取り入れており、自分たちが身に着けるもの、作るもの、そして観光客に売るものにも蛍光色をたくさん使っているのである。【写真

17】

島民が作り出す織物、編物に関して、積極的  
に変わるものがあるのに対し、変わらないもの  
がある。それは、増えることがあまりない模様  
である。タキーレ島民が織り込む模様は抽象的  
なパターンとしてタキーレ島の6つの村をあ  
らわしたマーク、はさみ、祭りの旗、港など  
がある。他にも、鳥や魚などが織り込まれており、  
それらはかなり前の織物にも見ることが出来  
た。しかし、ここ20年ほどで島民の生活に身  
近になったモーターボートが織物に織り込ま  
れることはないし、それ以前に人が描かれるこ  
ともない。20年以上前の織物のデザインを見  
ることが出来たが、それらは現在と同じような  
配色と模様が織り込まれている。先述してい  
るが、織り方の伝承は親子間でおこなわれて  
いるが、それは既存の家のパターンを少し変  
えたものであり、比較の変えやすいものであ  
ったと思われる。人、モーターボートといった  
デザインが生まれにくいのは、伝承され続け  
てきた技術では新たな図柄が作りにくいとい  
うことと、今までの技術で十分な模様のパ  
ターンがあることが挙げられる。

織物、編物で赤・黒・白が島民にとって重  
要な社会的な意味を表すことに変わりはない。  
赤は、織物に蛍光色のピンクやえんじ色とい  
った赤の同系色が入っていても、赤系統の色  
であるのでよいとされており、昔からの重  
要な色として島民に伝承され続けている。黒  
は祭事の際によく取り込まれる色であるが、  
今の黒は、羊毛のころには出なかった科学  
染料の色で濃い色である。島民は購入する  
糸から作って以前の色と色の明るさや色調  
が違っていてもよいと感じている。なぜなら、  
新しい同系色の色や、より明るい色を織り  
込んだとしても、タキーレ島

の生活において重要な色が表わす意味、それ  
が変わらないからである。島民の生活の中  
で、織物、編物の表わす意味は決まってい  
る。それが彼らの受け継いでいるものだ。彼  
らはその範囲の中で色を明るくしたり、同  
系色の色を継ぎ足したりしているのだ。色調  
は変わっていても、島民にとっての重要な  
色の意味は変わっていないのである。【写  
真18】

## 第5章 考察

これまでに、第2章ではタキーレ島の現  
在の衣装について詳しく記述し、タキーレ  
島民にとって織物、編物が社会的にどれ  
だけ密着したものであるのか、また、密着  
しているがゆえにそれがどうやって、なぜ  
変容するのかを島民の「赤」へのこだわ  
りを元に考察した。タキーレ島の衣装は  
社会的な役割を果たすものであり、現在  
でも島民は普段着としてこの伝統的な装  
飾品を身に着けている。その中で赤とい  
う色は既婚であることやタキーレ島の織  
物の象徴的な色として意味を持つ色であ  
る。作られるほとんどの織物、編物には  
赤が織り込まれているし、既婚という社  
会的な意味を表わすものもある。そして、  
この赤を中心として使う色の変化が起  
きている。描かれる模様、配色といった  
部分のデザインで大きな変化を見せない  
が、外部からもたらされた新しい素材に  
よって、赤を中心に色を多く取り入れて  
変化している。

第3章では、タキーレ島の織物、編物に  
影響を与えている観光地化について記述  
した。彼らは、物々交換をおこない、伝  
統的な生活をしていることを観光客から  
求められている一方で、観光をきっかけ  
とした貨幣経済の浸透などにより、生活  
が大きく変化している。今までに食べ  
ることがなかった食べ物を食べるよう  
になり、ガスや電気を購入し生活が便利  
になった。

自分たちの文化を見せるということで現金収入の道を得た彼らの生活面での変化は、ここ20年ほどの間に急激に起こっており、島民もこの変化を好意的に受け止めている。

第4章では、このような生活面の変容とともに、伝統的に作られてきた、織物、編物の技術がどのように変容しているのかについて述べた。材料の変化はそれまでも起きていたのだが、主にここ20年間ほどで、かれらの織物、編物は工程面、新たな織物、編物の出現、色彩と模様といった面で新たに変容を遂げている。具体的には、今までおこなってきた糸作りの工程を省き、糸を購入することで糸作りの時間短縮をおこないより多くの織物、編物の生産に時間をあてるようになったこと。観光客への土産物として、自分たちは身に着けないかばんや、つばつきの帽子、ブラウスなど新たな商品を作っていること。そして彼らの文化の中で重要な色である赤を中心に、糸を購入することによって細かい色の違いを織物、編物に求めるようになっていたことを具体的に記述し、その一方であまり変容を見せない織り込まれる模様と配色を指摘した。

タキーレ島の伝統的物質文化である織物、編物はここ20年間ほどで変化を見せている。しかし、この伝統的物質文化の中には、変容するものとしめないものがある。織物、編物を作る際に、描かれる模様や基調となる配色といったデザイン部分では大きな変化は見せないが、外部からの新しい素材を手に入れる環境になったとき、赤を中心に色の種類が多く取り入れられている。20年以上前の織物には、赤や、黒、緑や、紫といった植物から取れる限られた色しかできず、そしてそれらの色は総じてくすんだ色であったのに対し、今の色はより鮮やかな蛍光色もたくさん取り込んだ色を求めている。

グラデーションに富んだ織物、編物があふれ、その色の好みは彼らの購入してくる既製の服にも表われている。その新たに付け加えられた色は、とても明るく、決して伝統的な染色方法では出ない色ばかりである。観光客側は、伝統的な草木染めの地味な色合いを求めることもあるが、タキーレ島民は地味な色合いを現在は好んではない。そして、観光客のために作る土産物に関しても、自分たちの好む派手な色を使っている。

彼らは好き勝手に色を変えているのかといえばそうではなく、彼らにとっての社会的な意味の持つ色は決して変わることはない。赤と決まっている織物、編物では、赤の部分に赤系統のグラデーションを施し、他の色についても細かい色の变化を求めている。

彼らが今作っている織物、編物は20年以上の前のものと比べると、かなり配色は違うものである。しかし、この変容は、彼らの美的意識に合ったものに、彼らの物質文化と関連させて彼ら自身が選んだ結果であり、むしろ積極的におこなっている変容といえるのではないだろうか。外部の人間が見たときに、伝統文化の破壊であると指摘するかもしれない数々の変容は、彼らにとっては破壊ではなく、連続と続く慣習的技術と文化に沿って起きる、新しい創造なのである。

## 第6章 結論

タキーレ島の伝統的物質である織物・編物は、観光地化を含めた外部からの影響により、変容している。彼らの織物、編物の文化は生きている文化であり、変容は彼らが選んだものである。「伝統」とは長い年月を経たものだと思われがちであるが、実際にはごく最近に成立しているものが多い。(エリック・ホブズボウム テレ

ンス・レンジャー 1992) 外部の人間の思うタキーレ島の伝統は実はごく最近に成立したものである。彼らは伝統的物質を自分たちで変容を選び、また新たな伝統を作り出している途中にある。ここ20年間で変わった事例として、上述した、直接現金収入につながるお土産としての織物、編物を新たに作り出す。糸を購入するようになり、時間のかかる糸作りの工程を省くなどが挙げられた。これらの事例から彼らは観光客を意識しているということが考えられる。観光客が来て買って行くからこそ彼らは伝統工芸品の製作を行っているのである。彼らは観光客が自分たちを珍しいものとして見ていることも知っているし、自分たちの織物・編物の文化が伝統文化と言われていることもわかっている。毎日訪れる外部の人々が「伝統的」なものを喜ぶというのも知っているのである。

しかし、彼らの作る土産物は観光客の好みに完全に徹しているかといえば、決してそうではない。色彩面からは観光客の好みをあまり考えてはいないようである。実際、観光客がよく購入するのは、島民の好きな蛍光色などの明るい色を織り込んだものではなく、地味な色合いのものか、お土産用の製品である。むしろ島民は、観光客が買わなくとも、色合いが自分たちがよいと思っているものを出しているようである。現金収入が入るようになる前までの糸作りでは、植物から限られた色しか出なかったのが、染色された糸を購入することによって、様々な色を組み合わせることができるようになった。このことは、彼らの生きている文化にとって大きな変化であった。

変化の中で、模様や根本的な配色からもわかるように変わらないものと、鮮やかな色を積極的にいれるといった変わるものが出てきてい

る。タキーレ島民の中で、ここは変えていいが、ここは変えるべきではないという部分が存在するのである。なぜそうなのか。タキーレ島において伝統的物質文化の中で変容する部分と変容しない部分を考えたとき、彼らの伝統的な意味をもつ色に対しての配慮がうかがえる。むかしから社会的な意味の強い色である赤色は、今の織物で、いくらグラデーションをきかせていても、依然と同様に赤系統の色なのである。そのほかの、緑や青などの色に関しても、赤以外の部分でグラデーションを活かしながら織り込んでいる。このことから、彼らの中で重要なのは、デザインや配色を変えることや、身につけるものそのものを変えるのではなく、伝統的な意味を持つ範囲内で、彼らの思う、より見栄えのいいものを作るという点で変容するかしないかでわかれているのである。彼らの、蛍光色をはじめとするより明るい色使いは、彼らにとって赤を中心とした伝統的な色に関連して積極的に受け入れられたより見栄えのよい理想の織物、編物になっているのだ。また彼らは、変容を経た織物、編物は自分たちが昔から作り続けていた織物、編物として認識しており、次世代に受け継がれていくのである。

## 謝辞

この論文を書き上げるにあたり、様々な方にお世話になりました。

私に、タキーレ島の生活と織物・編物の技術と知識を教えてくれたタキーレ島の人たち、特に、アリシア、マテオ、フレディに。私の下手な言葉を一生懸命聞き取り、様々なことを教えてもらったこと、心から感謝しています。地図は今田文さんが作成していただきました。ありがとうございます。

そして、この論文を書く上で、数々の場面で助言してくれた竹川大介先生とゼミ生（以外の方も）の方々、本当にお世話になりました。深く感謝しています。

タキーレ島に関する情報を下さった、飯尾響子氏、伊地知美智子氏にもこの場をもってお礼を言わせて頂きます。

## 参考文献一覧

ハロルド・オズボーン

『ペルー・インカの神話』 1992 青土社  
デイビット・M・ジョーンズ, ブライアン・L・モリノー

『世界の神話 アメリカ編』 2002 原書房  
エリック・ボズボウム, テレンス・レンジャー

『創られた伝統』 1992 紀伊国屋書店  
『HOLA! AMIGOS』 52号 ミュージックアミーゴス 2004

『ペルー観光公式ガイド』 ペルー大使館発行  
2004

タキーレ島に関するホームページ Ines  
mamanimachaca のコメント

<http://tortolita.at.infoseek.co.jp>

名前	形・大きさ	色	製作者の性別 着用者の性別	社会で示す役割/着用法
チュウリョ (chullo) 【写真7】	・長さ約40cm ・ニット帽の形 ・長いので折ってかぶる	・半分白、半分模様を編みこんだ赤 ・全て模様入りの赤 ・多彩な色(耳あてつき)	男性 男性	・半分白が入っていれば独身、すべて赤であれば既婚 ・耳あてつきはアウトリダーデスのみ
ファッハ (faja) 【写真8】	・幅15cm,長さ1mの腰巻 ・先に幅1cm,長さ110cmの細い紐がつく	・赤を基調とし、模様を織り込む	女性 男女	・とくにないが儀礼の際にはみなこれを巻く
チャリ (chali) 【写真9】	・幅30cm,長さ1mの腰巻	・白を基調とし、黒の直線を織り込む	男性 男性	・日常着として主に独身者が巻く
チャレコ (chaleco)	・腰の高さよりも短いベスト	・黒	男性 男性	・日常着としてブラウスの上に着用する
チユspa (chuspa) 【写真10】	・縦20cm,横18cmの袋 ・腰に巻くように幅1cm,長さ1mの紐がつく ・下のすみには多彩な色のボンボン	・赤を基調とし、模様を織り込む	女性 既婚の男性	・コカの葉専用袋 ・儀式の際には独身男性、儀礼によっては女性も携帯するが、日常的には既婚の男性のみが携帯する
チュンピ (chumpi) 【写真7参照】	・幅15cm,長さ1m,厚さ1cmほどの腰巻	・黒と白 ・羊毛と髪の毛	男性 主に男性	・髪の毛は結婚の際、新婦の髪の毛を切り、より糸として用いる ・車輪のない生活の中で腰への負担を減らし、髪の毛を織り込むことで精神的にも守られる
モネデロ (monedero)	・コカの葉入れであるチユspaを小さくした形	・赤を基調とし、模様を織り込む	女性 男性	・財布として用いる
チュコ (chuco)	・縦1m,横2,2m被り布 ・4隅に多彩な色のボンボン(ticacha)	・黒	男性 女性	・女性が日常的に被り布として用いる
プンチョ (puncho)	・縦2m,横1mほどの布 ・真ん中に頭が通るほどの穴がある	・グレーなど暗めの色に模様を織り込む	女性 男性	・アウトリダーデスが儀礼の際肩にかける
チャマラ (chamara)	・長袖のジャケット	・黒	男性 アウトリダーデス	・アウトリダーデスが日常的に身につける
ポジェラ (pollera) 【写真11】	・長さ60cmほどの短いスカート	・赤、青、緑、黒など多彩な色がある	男性 女性	・女性の日常着 ・日常でも何枚か重ねてはき、儀礼の際には、5枚以上は重ね、一番上の色を黒とする
チャリーナ (chalina)	・幅15cm,長さ1mほどのマフラー型	・グレーなどを基調とし、模様を織り込む	女性 男性	・儀礼の際に、主に男性が身につける
チュンパ (chumpa)	・ブラウス	・白 ・女性用の赤(現在は作らない)	男性 男女	・現在女性は既製のものを身につけるが、赤系は既婚、白や黄色は未婚を表す
パンタロン (pantaron)	・ズボン	・黒	男性 男性	



図2 ペルー位置



写真1



写真2



写真3



写真4



写真5



写真6



写真7



写真8



写真9



写真10



写真11



写真12



写真13



写真14



写真15



写真16

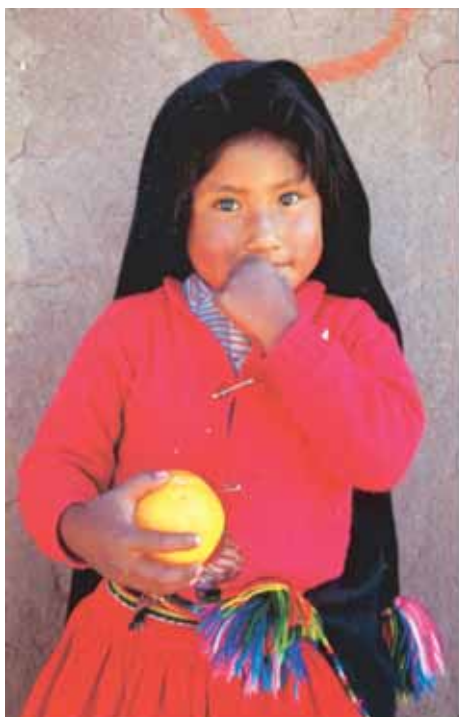


写真17



写真18